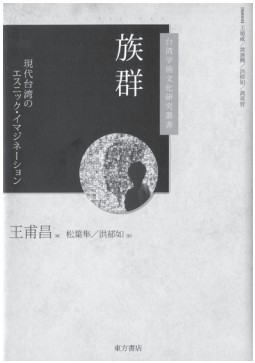
王甫昌著　松葉隼・洪郁如訳

族群
――現代台湾のエスニック・イマジネーション

東方書店／2014年11月／192頁／2700円＋税



日野みどり

本書の概要と意義

本書は、二〇〇三年に台湾で刊行された『当代台湾社会的族群想像』（王甫昌、台北：群学出版）の日本語版である。著者の王甫昌は、原著刊行当時は中央研究院社会学研究所副研究員、現在は同研究所副所長を務める社会学者である。

本書は、台湾における「族群」（エスニック・グループ ethnic groups の中国語）概念をめぐる議論を主題とし、その本質を解き明かすものである。「現代台湾において「族群」は間違いなく最も論争を呼びやすい話題の一つである」（一頁）との明言で始まる本書は、「族群とは誰も触れたくはないが、やめようにもやめられない話題のようである」（二頁）にもかかわらず、「人々が族群現象の特質と本質について多くの誤解をして」（二頁）おり、「台湾社会には、様々な形で族群現象に関する思い込みや価値判断があふれかえっている」（二頁）との認識を示す。その上で、族群の概念はどのように生まれ、誰によりいかに用い

られてきたか、族群概念と族群運動の本質は何であるかを論ずる。

本文は二つの篇からなる。第一篇「族群とは何か」では、「族群」「族群アイデンティティー」に関する従来の研究を整理した上で、「族群の想像」という理論が提示される。第二章で、著者は「族群」と「族群アイデンティティー」について「集団の分類を想像する／させるための方法」だと主張する。また、「ある集団が族群か否かについては論じない」、なぜなら族群集団は「人々の「族群の想像」によって生み出されたものであ」り、血縁関係や言語など本質的な特質は必ずしもその存在の前提ではないからだとする（四四頁）。これは重要な議論であるが、族群概念について一定の知識ないし認識を持つ台湾人にとっても、そうでない台湾人にとっても、虚を突かれるような話であろう。族群概念は常に政治とともにあり政治的利害関係に直結する要素だと見なされてきたならば、なおのことそうである。

続く第二篇「現代台湾社会の族群の想像――台湾の四大族群」では、まず、「四大族群」として知られる分類が「台湾の歴史上の異なる時期に現れた、三つの族群分類法を一つに合成して生み出されたものである」（五一頁）こと、「実際には一九九〇年代に民進党の政治家が異なる歴史時期におけるそれぞれの族群分類を一つにまとめた結果である」（五五―五六頁）ことを確認する。そして、それらの分類を生み出した「族群の想像」の起源は早くとも一九八〇年代初期であると論じ、「台湾の族群関係は戦後の本省人と外省人の接触より始まった」という一般的な理解を覆す（第三章）。次に、三つの族群分類――「本省人」対「外省人」、「原住民」対「漢人」、「閩南」対「客家」――の形成過程と実態を順に検証し（第四章～第六章）、さらに、「族群の想像」や族群運動の政治性が考察される（第七章～第八章）。結論（第九章）では、族群運動が「族群の想像」に大きく関わると述べつつも、族群運動の内容よりはむしろ運動の誕生を促した社会的文脈、すなわち族群間の相互関係に目を向けることを提唱する。そうすることで、「我々」は族群意識が社会に立ち現れている理由とそれが目的とするところについての問いに向き合うことができ、「我々の社会」は族群対立の泥沼に入り込むことなく成長し進んでいけるだろう、と著者は本書を結んでいる。

本書の学術的貢献としてまず挙げられるのは、「想像」の理論を援用して、台湾社会の「族群」概念には固有の実体・実質はなく、それは集団間の政治的角逐の必要から生じた「想像」の産物だと論じる点であろう。台湾社会において族群政治はすぐれて可視的な現象であり、同時に集団の政治的権益に直結する要素でもある。従って「族群とは実体を持つ利益集団だ」という認識は、台湾の人々にとってある種の自明な前提だと言える。それゆえ、本書に対しても、族群の定義や族群の範囲の措定などへの期待があっただろう。しかし著者はそれに応えない。代わりに提示するのが「想像の産物」という大胆な理論である。「想像」というキーワードはナショナリズムの起

源を論じたアンダーソンのよく知られた議論を想起させるが、この理論は台湾の族群現象を読み解く上でも有効だということが説得的に示される。また族群間の相互関係についても、それを生んだ社会的文脈に関心を向けることを著者は訴え、各族群の主張の内容それ自体を論じることをしない。というのも、各族群の主張の内容そのものには白黒をつけがたいし、正否を判定することも難しく、常に反発や対立を招く恐れがあるからだと著者は言う。すなわち、本書は族群論でなくメタ族群論を展開し、各族群の主張についても、あるいは族群間の関係についても、内容に対する判定・判断を行うのでなくそれぞれの論理を捉えようとする。すぐれて学術的・科学的な姿勢といえよう。

また、「族群」を通じて台湾の歴史を読者の眼前に展開していることも、本書のすぐれた点である。著者が「族群」概念の実態と本質を解明する過程は、結果的に、日本統治期から戦後を経て現在（原著刊行時点）に至る台湾の政治・経済・社会・文化史を描き出しており、族群の想像が台湾の来た道において良くも悪くも大きな影響をもたらす要素であったことを、読者は台湾史をたどりながら改めて確認できる。

さらに、議論の展開においては文献資料に加えて統計や図表などの数値資料が効果的に用いられている。社会学の手堅い手法が著者の論理を支持し、同時に読者の理解を助けており、この点も評価に値しよう。

本書から得た所感
——日本の大学教育現場に引き付けて

今回の日本語版刊行は原著刊行以来一〇年以上を経てのものだが、洪郁如が「訳者あとがき」で「本書は「日本語版はありますか？」と尋ねられる頻度の最も高い台湾関連の専門書であった」（一五〇頁）というように、本書は日本において出版の要望が強かった著作だという。本書は、黄英哲・洪郁如ら日本で活躍する台湾人研究者および台湾・アメリカの研究者らが企画した「台湾学術文化研究叢書」シリーズの第一巻として世に出たが、本書がもたらす学術的知見の重要性を考えれば、それもうなずける。

本書の巻末には若林正丈による解説が収録されている。そこでは、原著の時代背景、原著者の研究内容と中心的論点の概括のほか、日本の学界における本議論の受容と展開にも言及があり、自身の研究[1]および沼崎一郎が新刊書[2]に示した論点を紹介しながら、本書の内容に即した説明がなされる。これは現時点で日本における台湾研究の最先端の議論であると言え、この一文により本書の学術的価値はいっそう増している。ただ、本稿でその内容を論じることは、台湾研究を本職としない評者の手には余る。代わりに、ここでは評者の限られた教育面の経験から得た雑感を記したい。

評者の注意を引いたのは、本書の内容が高校生向けの講演および大学の講義を元にしている点である。つまり、専門的な内容を備えるとはいえ、本書は研究者に向けて執筆された書籍ではなく、想定される読者は「高校生・大学一、二年、

もしくは社会科学を学んだことがない人である」（四頁）。加えて、洪郁如が「訳者あとがき」に記す以下の問題意識は、日本の大学生の台湾理解の現状を如実に示して評者としては大いに同意するところであり、また本書と向き合う上での重要な留意点となった。

筆者[3]が日本の大学で台湾史を教えた経験からすれば、族群概念とはある種、諸刃の剣のようである。台湾を理解するうえで、それは確かに明瞭かつ簡便な概念でありながら、容易に本質主義的な誤解をもたらすものでもある。限られた授業時間のなかで、いかにして効率よく、族群というものをいわば脱構築しながら認識するかは筆者にとっても教学上の一つの挑戦であり続けた。（一五〇頁）

大学の授業で台湾を取り上げた経験者として、評者も洪と同じ問題意識を持つ。日本で学ぶ学生がなるべく混乱せず正確な理解を得ることを助けたいが、「明瞭かつ簡便な」図式を示そうとすればするほど、洪の言う本質主義的誤解のジレンマを感じざるを得ない。関連して想起するのは、台湾でやはり既成観念を打ち破る著作としてベストセラーになった歴史概説書『図説 台湾の歴史[4]』を学生に読ませたいと考えながら読む際に感じる、ある種の緊張ないし警戒感である。つまり、非常に重要な書籍なのだが、台湾の読者ほど台湾の歴史を知らない（つまり、既成観念すら持たない）日本の読者には、台湾の読者と同じようにこの本を消化することは難しい。この書籍を教育にどう活用しうるか、教える側のビジョンと力量が試されるのだ。

『図説 台湾の歴史』ほどではないが、本書にもまた、日本の大学生が読むにあたっては台湾の政治や社会について基礎的な知識を要する部分もある。その意味で、本書を教育現場で活用する際には若干の留意すべき点があろう。それが何であるかは、扱う内容により、また学生の状況により、一様ではない。ここでは、本書を読みながら評者の頭に浮かんだ「学生はこんな反応をするのではなかろうか」という点を、評者の私的な覚え書きというほどの趣旨で若干記したい。

例えば、「政治的闘争の道具として族群概念が想像された。自分の属する集団が政治的マイノリティとなり抑圧されることを恐れるがゆえに族群運動を展開した」という論旨に対しては、「台湾人はなぜそんなに政治に熱心なのか？　権力に貪欲すぎるのではないか？」という類の感想が出てくるような気がする。日本の政治状況を思えば、それも無理からぬ反応であろう。台湾と異なり、日本では社会集団の成員の出自が単一であると信じられる環境が与えられ（それは実は虚構なのだが）、また有権者のうち支持政党を持たない人が過半数を占める「最大勢力」となり、日本はかつてない重大な局面にあるにもかかわらず、大半の国民は政治参加への意欲を自ら忘れ去っているようである。こうした社会で育った大学生が、族群政治の台湾における意味を実感しづらいとしても、無理はない。ならば、戒厳解除後の台湾の政治・社会状況を彼らが少しでも想像できるよう、特にそれが戒厳期とどのように異なったか

を想像できるよう、工夫する必要があろう。政治関与が厳しく禁じられていた状態が終わり、思想信条言論に対する制限が解け、人々が自分の権益を認識し、それを主張することが徐々に始まった時代とは、どのような変動をもたらしたろうか。政治的見解を持つこと、政治的な立場を持ちそれを表明すること、政治を通じて自らの属する集団の利益を勝ち取り、維持することは、当時の人々にとってどれほど切実な欲求であったろうか。そうした点に学生が想像を及ぼしうることが、理解を深める上できわめて重要であろう。

またあるいは、「想像の産物」としての族群概念という議論に対して、「頭の中で想像しただけの実体のないことが、それほど重大な影響を及ぼすものだろうか？　考えすぎではないのか？」という類の疑問を持つ学生もいるかもしれない。これに対しては、それほど重大な影響を及ぼすものなのだ、ということを事例とともに時間の許す限り示すしかないだろう。台湾は、二・二八事件とそれに続く白色テロを経験している。これを「出来事」として学ぶしかない日本の学生には、直ちにリアルな実感を得ることが難しいかもしれない。しかし、世界で現在起きているイスラム原理主義者集団の過激な行動はどうだろう。その論理の出どころもまた「想像の産物」とは言えないだろうか。あるいはさらに身近な現象として、日本国内の「反中」「嫌韓」言論やヘイトスピーチを見よ。これらが展開する激烈な批判・罵倒は、しばしば事実誤認に基づく。つまり、事実に依拠しない「想像の産物」に他ならない。だがそのようなものであれ、対象に与える打撃は大きく、社会に及ぼすマイナスの影響も大きい。これらの行為を存在せしめているのが現今の私たちの世界なのだということを、教える側も学ぶ側も、改めて認識すべきなのかもしれない。

いずれにせよ、起き得る反応に留意しつつ、本書を大学教育の現場で何らかの形で活用することには、大きな意義があると確信する。そしてまた、本書の教育的意義は他にもある。例えば、ひとりの人の族群アイデンティティーはひとつだけとは限らず、また固定的でもないとして、族群アイデンティティーの多重性（あるいは多層性）を強調する点は（五二―五五頁）、とりわけ日本の読者には学ぶところの大きい論理の枠組みであろう。「一枚だけレッテルを貼る」、つまり「正解が一つだけある」ことが最もわかりやすいと感じる大学生は多いだろうが、実際の人間はそれほど簡単ではない。さらに、前節で触れた「価値判断を下すのではなく、当事者の論理を理解することに努める」姿勢も、問題に向き合う際に重要であり、学生に大いに学ばせたい点である。

蛇足ながら、本書の日本語訳には若干改善の余地があると感じる。論旨が不明瞭な点、日本語表現が不自然な点などがいくつかあり、原著と読み比べてようやく議論の要点を理解した箇所もあった。たいへん重要な書籍の日本語版刊行であるだけに、惜しまれる。（文中敬称略）

注

〈1〉 若林正丈『台湾の政治――中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、二〇〇八年。

〈2〉 沼崎一郎『台湾社会の形成と変容――二元・二層構造から多元・多層構造へ』東北大学出版会、二〇一四年。

〈3〉 訳者の洪郁如を指す。

〈4〉 周婉窈『増補版 図説 台湾の歴史』濱島敦俊監訳、平凡社、二〇一三年。